

ヤーコプ・ヴァッカーナーゲル著『統語論
についての講義 I』(翻訳 第七回)

酒 見 紀 成*

(平成元年9月25日受理)

XIX.

動詞の人称形について語る時、古代の用語法が話の糸口になる。ディオニューシオス・トラクスの小冊子では *πρόσωπον* という表現が使われており、これはラテン語では *persona* と訳された。我々はその言葉によって動詞の「人称」のことを言っているのだが、必ずしもその術語にそれが本来持っていた意味を与えているわけではない。我々が「人称」と呼んでいるものは、ギリシア人がその文法用語を作った時代にはまだ *πρόσωπον* によって表わされていなかった。この語は元来「かんばせ、おもて」を意味する。当時の舞台用語の慣用では役者の仮面、*ὕποκριτής* [俳優] がまとう人工の顔の名称であり、そこから役者が演じなければならない役をも表わす。これがアッティカ人の語法であり、彼らはその用法を逸脱することはない。そこからようやく徐々に人が人生において演じる役割を、つまり個人的な地位を *πρόσωπον* で表わす用法が発達したのである。ラテン人は確かに *πρόσωπον* を「顔」の意味ではなく、より新しいすべての意味において *persona* と翻訳した。この語は元来「仮面」を意味し、恐らくエトルリア語に由来すると思われるが、そのことは演劇がエトルリアからローマにもたらされたので、一層理解できる。その後この「仮面」という語に、これに対応するギリシア語が後の時代に持つことになる意味が与えられたのである。「演劇における役」と「人生における役割」を表わす *persona* は意味上の借用語である。同じことは文法用語としての *persona* についても言える。文法家が三つの *πρόσωπα*、三つの *personae* について語る時、彼らが考えているのは、ある人が語る時にとり得る三つの役である。

我々は一人称、二人称、三人称と言い、この順序に動詞形を並べるのが常である。この配列は分かりやすいが、自明のことではない。逆の順序がインド人の場合に認められ、彼らは三人称が概念的に最も一般的で

あるので、これを最初に置く。

この問題にもう少し詳しく触れよう。我々は動詞を形態的特徴によって定義する時、先ず「ある語が人称語尾を持っている時、それは動詞と呼ばれる」と言わねばならない。しかし本来の人称語尾を持たない動詞形も存在する。これは厳密に言えば単数の命令形に当てはまる。それらは時制の語幹だけでできており、例えば *λέγε* は *λέγετε* [pl.] の語幹の部分と同一である。従ってそれらは形態から判断すれば、人称に関して中立である。これと関係があると思われるのは、特にギリシアの劇作家の作品に現われ、しばしば観察されてきた現象である。そこでは命令法二人称単数が不特定の第三者に対する命令にも用いられ得る。特に主語のより詳しい特徴づけとして *πάς* のような単数が存在する時にそれが起こる。例えば喜劇作者クラティノス¹⁾ の『オデュッセウス』断片144 (コック²⁾ 編『喜劇作者』I, 58) に *σιγὰν νῦν ἅπας ἔχε σιγὰν* 「さあ誰でも沈黙を守りなさい」とあり、*ἔχε* が *ἔχεται* [3. sg.] の代わりに使われている。多数の類例がアリストパネスに見出される。エウリーピデースの『バックスの信女』173の *τις* を持つ例 *ἴτω τις εἰσαγγελλε*³⁾ 「誰か行って申し上げてくれ」も同様である。アイスキュロスにはこの命令形が空に向かって言われているのが見出されるが、話し手は特定の人間を意図しているわけではない。プラス、『ライン文学博物館』62, 275を参照せよ。

またすべての動詞とすべての動詞語幹に三つの人称形がすべて現われるとは限らない。一人称単数の命令形が欠けているのは当然のことであり、一人称複数の命令形がどの程度使われ得るかは後で問題にされるだろう。逆に例えばラテン語の「願わくは、我々は願う」を表わす挿入語 *quaeso, quaesumus* は一人称に限られている。「願う」を表わす語が一人称に限られているのは理解できよう。また時々〔活用形の〕欠如が全く形態上の理由による場合がある。例えばラテン人が

* 広島工業大学外国文学語学教室

fatur「彼は言う」の一人称単数形を作らなかったのは、一体に一音節の動詞形に対するある種の嫌悪感が支配的であったことと関係があり、**for*⁴⁾「私は言う」には類似物がほとんどなかっただろう。

すると三つの人称はどこで区別され、その用法はどうなっているだろうか。(我々は差し当たり古典語だけに話を限定する。) 先ず第一に、主語は動詞形において人称語尾それ自体の中に与えられているが、同じ文中で動詞はなおどの程度まで特別な主語表現をとり得るだろうか。これはいわゆる第三人称では難なく明らかとなる。ここでは主語が文脈から明らかにならない時、動詞の概念が付与されている三人称のさらに詳しい表示として、主格の名詞か代名詞が動詞のそばに現われる現象が確かに存在する。その際アッティカ方言は間接再帰代名詞の主格をも用いたという事に注意を促そう。これは単数(♀女性形!)では稀にしか現われないが、複数(*σφείς*)ではもっと多く現われる(同じ意味で *αὐτός* の諸形態やラテン語の *ipse* の諸形態も〔使われる〕)。

二つの一人称については二つの事を言わねばならない。先ず、三人称で主語が現われるように、その性質によっては一人称でも主語が比較的古いギリシア語で認められないわけではないということである。一人称の動詞に主語が、実詞的表現であれ、代名詞的表現であれ、付加されることがある。最初のケースについて二重〔主語〕の例を挙げよう。トゥーキューディデース I, 137, 4にはテミストクレースが大王〔アルタクセルクセース〕に宛てた手紙の冒頭に *Θεμιστοκλής ἤκω παρὰ σέ*「私、テミストクレース、陛下に参す」とある。同じくタキトゥスは『年代記』XII, 18でミトリダーテースに *Mithridates sponte adsum*「私、ミトリダーテースが自ら参った」と言わせている。また特に、すでにホメロス以来見出されるが、性を持つ代名詞の主格も同様に一人称と二人称の主語として現われる。例えば関係代名詞が一人称で表現された主語を受け、この関係代名詞が〔関係節の〕主語となる時、動詞もまた一人称か二人称で現われるだろう。例えば *ι 466 φάνημεν, οἱ φύγομεν θάνατον*「死を遁れた私達は……と思われた」、*Ψ707=753 ὄρνυσθ', οἱ καὶ τούτου ἀέθλου πειρήσεσθον (πειρήσεσθε)*⁵⁾「さあ出てくれ、二人だけ、この競技をやってみようという武士は」。これは関係文だけに限らない。例えば *οἱ ἄλλοι* もしばしば一人称複数や二人称複数と共に現われる。また *η 307 δύσζηλοι γάρ τ' αἰμὲν ἐπὶ χθονὶ φῶλ' ἀνθρώπων*「われら地上の人間の族は嫉妬深いものなの

だ」に注意されたい。アッティカのギリシア語法にも類例がある。またある人が別の人に *τίς δ' οὗτος ἔρχεται*「そこにいる汝はどなたかな」という K 82 のような箇所にも注意されたい。プラウトウスの『メナエクス兄弟』779 *uter meruistis culpam?*「お前たち二人のうちどっちが悪い事をしたんだい?」を参照せよ。本来なら *meruit* と言うべきところであるが、呼びかけであるので、二人称が使われており、またその呼びかけが二人に向けられているので、複数になっている(これは広義には先に103頁で論じた複数のケースに属する)。同書785 *neuter ad me iretis*「二人ともわしの所に来ないように」を参照。

我々が扱わなければならないもう一つの問題は、一人称と二人称の動詞に、いわゆる人称代名詞がどの程度まで添えられるかである。人称の概念が特に強調される場合、すぐにそれは別に人称代名詞を置くことによって表現されるということは自明のことである。例えばリュウシアース I 26 *οὐκ ἐγὼ σε ἀποκτενῶ, ἀλλ' ὁ τῆς πόλεως νόμος*「お前を殺すのは私ではなく、この都市の法である」。これと多少似ているのは、話しかける相手に、その話が彼に関係することを気づかせようとする時、命令法にとかく *σύ* が、特にラテン語で *tu* が添えられることである。

しかし古代ギリシア語及びラテン語における代名詞の主格の使用はこれだけではない。先ずごく稀なものを〔挙げよう〕。イオーニア方言の散文では、ヘーロドトスの散文を読めば分かるが、条件を表わす前置文の帰結文にはよく *δέ* が与えられ、そしてこの *δέ* にとかく代名詞の支えが与えられる。動詞が三人称で現われる時は、例えば *ὁ δέ* と書かれており、それに応じて一人称の時は *ἐγὼ δέ* と、二人称の時は *σύ δέ* となる。例えば Hdt. III, 68, 17 *εἰ μὴ αὐτῇ Σμῆρδιν γινώσκεις, σὺ δὲ παρὰ Ἀτόσσης πύθου*「もしそなた自身スメルディアスを見識っておらぬのなら、アトッサから聞くがよい」。その他ギリシア語とラテン語では自然な話し方において代名詞が非常によく冗語的に付けられ、また半ば後倚辞として添えられる。後者は根底においては全く奇妙であるが、インド語に類例があるので、恐らく祖語から受け継がれたものであろう。帝政時代初期のローマの民衆語がこの点でどういう状態にあったかをペトロニウスを引きながらマイヤー-リュプケが『ロマンス語文献学誌』XXII, 52頁以下で見事に示している。そこでは強勢のない *ego* や *nos* がよく動詞のすぐ後ではなくむしろ文頭か文を導入する小辞の後に現われる。明らかに、できるだけ

早く主語の人称を知らせる必要を感じたのである。このような文頭の弱く発音される *ego* をもつ *Ego...voluti* [私は……を欲した] から、例えばフランス語の、代名詞が動詞に前倚辞的に接続した *je voulus* が発達した。

その点で近代の用法はどうなっているだろうか。現代ギリシア語ではまだ人称代名詞の主格の、動詞のそばでの使用は、実際標準的な古代ギリシア語で通例であった所でしか起こらない。ここではそれ以上の発達は起きていないが、ロマンス諸語では様々の段階の発達が起きている。イタリア語とルーマニア語はローマの民衆語と同じ状態にある。スペイン語とポルトガル語はもっと進んでおり、現代フランス語は代名詞を置くことしか知らない。近代高地ドイツ語も事情は本質的に同じであるが、ここでは特定の場合に省略が可能である。

次に人称形の本来の機能に移ろう。我々はそれを実情に即して常に正確に考察するだろう。その際に先41-2頁でグリムの『小論集』Ⅲ、236頁以下に関連して談話における人称の交替について詳述した事を思い出して頂きたい。そこで論じた二人称単数の代わりに使われる尊敬を表わす一人称複数と関係があるのは、人間の一般的活動についての一人称複数の使用である。例えば η 307 (107頁参照) やオウィディウス『恋のうた』Ⅲ、4、17 *nitimur in vetitum semper cupimusque negata* 「我々はいつも禁じられたものを得ようとし、拒まれたものを欲しがる」(35行も同様)。Zubaty は『クーン雑誌』40、483においてこれとリトアニア語の *mātem* 「人は見る」(*matyti* 「見る」の一人称複数) を比較している。カエサルは『内乱記』Ⅱ、27、2 で *quae volumus, ea credimus libentur*⁶⁾ 「我々は自分が欲するものを喜んで信じる」と言い、『ガリア戦記』Ⅲ、18、6 に *ferē libenter hominēs id quod volunt credunt* 「およそ人は自分の望みを勝手に信じてしまう」と書いている。——また独白にも注意を喚起しておかねばならない。これはホメーロス以来文献に見られる。独白はすぐに一人称に移行し、ホメーロスでは υ 18 *τέτλαθι δὴ κραδίη* 「我慢しろ、心よ」以外は常にそうである。後者の方法、つまり二人称の動詞とする心や魂への呼びかけを用いるのはアルキロコス、哀歌、叙情詩であり、悲劇作者の中ではエウリーピデースが最初の使用者である。この人は(恐らくサッポールの断片59を除いて) 同じく二人称の動詞での荘重な自分への呼びかけを用いた最初の人でもある。例えば『メデシア』401-2 *φείδου μηδὲν ὧν*

ἐπίστασαι, Μήδεια 「メデシアよ、あらん限りの知恵をしぼるのだ」。この点及びギリシア人とローマ人におけるその後の発達についてはレーオの「独白」(『ゲッティンゲン学術協会論集』X、5) 94頁以下が大変優れており、J.グリムの今しがた挙げた論文を引き合いに出している。そこでは281頁以下ですべての〔人称の〕表現法がゲルマン諸語全体にわたって追究されている。グリムは293頁以下で、ある時は一人称を用い、ある時は二人称を用いることを「私の独白」と「汝の独白」と呼び、「これらは第一段階の独白と第二段階の独白として区別することもできよう」と言う。また「*du* は *ich* よりも強いので、第二段階の独白の方が強いであろう」と。

二人称に関しては、本当なら不特定の誰かによって述べられるべき行為が周知のようにギリシア語やラテン語ではとかく話しかけられる人に帰せられ、それに応じて動詞も二人称で置かれる。例えば Δ223 *ἐνθ' οὐκ ἂν βρίζοντα ἴδοις Ἀραγμέμνονα δῖον* 「この折に尊いアガメムノーンがねぼけ眼をしている所を見た者はなかったろう」。話しかけられているのは観念上の人であり、「詩人の聴衆である君がその場に居合わせたとしても、彼がねぼけ眼をしている所を見なかったろう」くらいの意味である。ホメーロスには *οὐκ ἂν φάιης* 「誰も言わないだろう」のような表現にもそのような言い回しが時折見られる。彼はこのように希求法の二人称や未来時制の二人称を *ἂν* と共に用いている。後代の作者たちも同様であるが、彼らはただし非現実の過去をも用いる。一方ギリシア語の慣用に従えば、そのような機能を直説法現在と直説法完了は持ちえない。話しかけられる者は実際動詞の概念の実行者ではなく、単に仮定として生み出されるだけなので、仮定を表わす動詞の形態が使われたのである。これに対応する箇所ではラテン語では接続法が、例えば *crederēs, dicerēs* 「人は……と考えたであろう、と言ったであろう」が認められる。この用法を『崇高について』⁷⁾ の才気あふれる著者が第26章で見事に評価している。それと並んで特に感覚の鋭敏な古代ギリシア精神の精通者、オランダ人コベットの観察にも注意を促そう。そこではデーモステネースの21(メイディアース⁸⁾ に反対する演説)、33から *τὸν ἄρχοντα ἐὰν μὲν πατάξῃς ἢ κακῶς εἴπῃς* 「もし人が当局の人を殴ったり、非難したりすれば」が引き合いに出されている。最良の写本にはこのように書かれているが、他の写本(及び第二の書き手による Σ)は *πατάξῃ τις* を持っている。そしてコベット(『本文批評論集』505)が、

アッティカ人の流儀は恥すべき行為をこのように二人称で表わし、そうすることでその行為を仮定的に話しかけられた者のせいにするのをとても嫌うと述べているのは尤もである。それは無作法であろう。それ故コベットはここではより劣った写本の異文の方が勝っていると考える。ちなみにこの表現形式は多くの言語で独立して発生しており、バルト諸語及び特にロシア語で頻出するその用法については Zubatý が『クーン雑誌』40, 480—1頁で論じている。

ここでは知らない人を行為者と考える呼びかけの形式が使われるが、逆に特定の人称表示の代わりに不特定の人称表示を用いる現象も生じる。近代の諸言語ではフランス語ほどそれがよく起こる言語はなく、ある人が自分について語る時も、他の誰かに話しかける時も *je, tu, vous* の代わりに *on* をよく使う。それについてリトレ⁹⁾ がその有名な『フランス語大辞典』において大変見事に論じている。この現象の出発点は人々が自分を引っ込めようとする事、そして他の人に対してもそれをするのは、やはりある種の遠慮に基づいているという事である。これはフランス語に非常によく起こるが、フランス語だけではない。ヴンダリヒはゴットフリート・ケラーの『寓意詩』から面白い箇所（『著作集』7, 15頁）を挙げている。すなわち「彼にはがまんできないからだ」——「おや、なぜ人は彼にがまんできないのかね」。明らかに「なぜあなたは彼にがまんできないのかね」と言うべき所である。しかし話し手はこの反感が一般的で、すべての人に共通であるかのように好意からそうするのである。ただしグリムは『ドイツ語文法』IV, 221 (=256²⁾) でこの用法をやや違った風に理解している。——全く同様にギリシア語も三人称の動詞をもつ *τις* による文を知っており、そこではある時は自分自身が、ある時は話しかけられる者が意図される。前者は悲劇や喜劇によく見られる。例えばソポクレスの『アイアース』403 *ποῖ τις ὄν φύγῃ* 「さればいずこに逃れんか」、そしてそのすぐ後に *ποῖ μολὼν μένω* 「われはいずこに行きて留まるべきか」。この箇所に注釈者たちは他の例証を多数挙げている。まさにこのような困惑と絶望の問いかけにおいて人は自分の運命と行為についてははっきりと語ることを厭い、あたかも人間に総じて当てはまる何かの問題になっているかのような態度をとるのである。またこのような表現形式には他の動機も考えられる。例えばエピクテートス II, 18, 15には恥すべき願望がそのような形式で述べられている（*σήμερον καλὸν ἰδὼν ἢ καλὴν οὐκ εἶπον αὐτὸς ἐμαυτῷ*

Ἵδελόν τις μετὰ ταύτης ἐκοιμήθη《「今日私は美しい少年か美しい女性を見たが、誰か（=私）が彼女と一緒に眠ることができたらなあとは思わなかった」。全く同じように我々が実際には二人称を意図している時、特におどしや警告を含む文において *τις* に出会う。E. ブルーンの『ソポクレス』の補遺54頁を参照。

主語が文脈や付属する名詞か代名詞の主格から明らかになるのは三人称の形態にとって普通のことである（或は少なくともそのように見える）。しかしまた特定の主語やよく知られた主語が存在しないこともある。我々は三つの場合を区別することができる。

1. 任意の多数の人々によって行われる行為が述べられる時に、「人々は」の意味で使用される三人称複数。ギリシア人とラテン人には実際この用法は「言う」を意味する動詞でしか知られていない。すなわち「人々は言う」を表わす *λέγουσι, dicunt* がそうで、不特定多数の話し手が主語として考えられている。このような場合この表現形式は特に分かりやすい。現代ギリシア語でもこれは優勢であるように思われる（トウンプ、『近代ギリシア語便覧』170—1頁参照）。ところが新約聖書のギリシア語では全く異なる動詞のもとでこの意味の三人称複数度が度々認められる。例えば『ルカ伝』VI, 44 (*συλλέγουσι σῦκα...τρυνῶσι σταφυλὴν* 「いちじくを取る……ぶどうを摘む」) 等々。理由は明らかである。不特定多数の行為を表わすための三人称複数能動態の使用はセム語、殊にヘブライ語とアラム語の言語タイプに特有のものである。従ってここでも我々は新約聖書の言語のセム語的語法を見ることが出来る（8頁参照）。特徴的なのは、このような三人称複数能動態がウルフィラによるゴート語訳では常に三人称複数能動態で訳されるとは限らず、例えば今挙げた箇所では『ルカ伝』VI, 44 *lisanda smakkans—trudanda weinabasja* のように、彼は時折受動態で言い換えることがあるということである。ルターはこのような場合 *man* と三人称単数〔の動詞〕を当てており、例えば上述の箇所では二つとも *man lieset* と訳している。これは何がある言語で生き続け、何があまり使われていないかを示す特にはっきりした証言が翻訳から得られる例である。（「人々」の意味の三人称複数に関するもっと一般的な事については Zubatý の論文、『クーン雑誌』40, 497頁以下を参照。）

XX.

2. 二番目の重要な用法は三人称単数の不定の意味での使用であり、しかもより古いラテン語やギリシア

語の法律用語の言い回しを先ず第一に挙げねばならない。十二銅表の法律は我々にとって最古のラテン語の言語遺産の一つである。言語学こそ個々の古物研究者の疑念に対して彼らのテキストが真に古代のものであることを証明できるのであり、この法律は我々が紀元前5世紀のものとして仮定しなければならないラテン語を示している。ところでここに *si in ius vocat, ni it, antestaminō*¹⁰⁾ 「もしある者が他のある者を裁判所に召喚し、その者が行かなければ、証人の召喚が行われるものとする」や *si nox* (古くなった属格!) *furtum faxit* 「もしある者が夜に盗みを働いたならば」のような文が見られる。最初の文では主語も目的語も、二番目の文では少なくとも主語が不特定のままにされており、従って任意のものがそれに当てはまると考えられる。これは非常に奇異であるが、ラテン人自身はこの用法を承知していたし、その後の法律においてもこれを模倣している。ところが全く同じものが古いギリシアの法律用語に現われ、言語使用地域の様々の所から例証される。私は有名なゴルテュンの法律の中の多数の例を指摘することで満足しよう。例えばコリツープラス編『クレタ島の碑文』4991 VI, 1) *θυγατρί ἦν διδώ* 「もしある者が自分の娘に(持参金を)与えたならば」では、与える者の名前はどこにもない。かつて明敏なF. スクッチュは十二銅表の文体と古代ギリシアの法律の文体との間の類似には、ローマ人の立法のギリシア人のそれへの依存がはっきり表われていると考えた。しかしそのような統語法上の表現形式は恐らく借用不可能であろう。従ってその一致は継承に基づいており、ここには非常に古風なものがあるに違いない。このことは古いギリシアの詩の文体に正にそのようなものがあるという事によって見事に確認される。例えばホメロス N 287 *οὐδέ κεν ἔνθα τεόν γε μένος καὶ χεῖρας ὄνοιτο* 「こうした際に、君の勇気や膂力をあななどの者は、けしてなかろう」がそれである。これに注釈者は事実即して正しく *λείπει τὸ τις* 「*τις* を抜かしている」と注記している。しかし我々は三人称単数の *ὄνοιτο* それ自身が任意の主語の行為を表わし得ると言わねばならない。X 199 も同様¹¹⁾。ヘシオドスにも同じものが見られ、例えば『労働と日々』291 *ἐπὶν δ' εἰς ἄκρον ἵκηται* 「(人が) 頂上に到れば」がそうである。ピンダロスにもあり、例えば「イストミア頌歌」5, 22¹²⁾。また「オリュムピア頌歌」6, 11 *πολλοὶ δὲ μέμνονται καλὸν εἴ τι ποναῖῃ* でも *πωναῖῃ* は受動態と解するより、コルキューラ島の方言やアルキロコスに詩にある *πονήθη* に従っ

て能動態として「もしある人が何か立派なことを成し遂げたならば」と解する方が良いだろう。さらにヘーロドトスにも例がある。

この用法は古代の言語以外でも二つの条件の下で見出される。先ず、定動詞が分詞によって支えられている時で、例えば偽のクセノポン著『アテーナイ人の政体』I, 10 *πολλάκις ἂν οἰηθεὶς τὸν Ἀθηναῖον δοῦλον ἐπάταξεν ἂν* 「アテーナイ人を奴隷だと思ってなぐることがよく起こる」がそれである。また分詞と同様の働きをラテン語のゲルンディウム〔動名詞〕がすることがある。例えばカエキリウス¹³⁾ の第175行(リベック編『ローマの喜劇』³75頁)に *diū vivendō multo quae non volt videt* 「長く生きていると、見たくないものを沢山見る」とあり、これをマステイウス¹⁴⁾ は *diū <quis> vivendō* と読もうとした。

次いで非常によく起こり、ギリシア人やラテン人の散文全体に特有であるのは、不特定の主語をもつ不定詞句に定動詞をもつ副文を、それも代名詞による主語の表示として *τις* 或は *(ali)quis* が添えられていない定動詞をもつ副文を従属させる現象である。例えばソポクレスの『コロノスのオイディプース』1225行以下 *τὸ δ', ἐπεὶ φανῆ, βῆνω κείθεν ὅθεν περ ἦκει, πολὺ δεύτερον ὡς τάχιστα* 「生まれたからには、来たところ、そこへ速かに赴くのが、次にいちばんよいことだ」がそれで、ここでは *φανῆ* と *ἦκει* にはっきりした主語がないが、この不特定の主語は動詞 *βῆνω* から補うことができる。同じものはラテン人にも度々見出され、それについてC. F. W. ミュラーがキケローの『ラエリウス』16, 59に付けた注で最もうまく論じている(386-7頁)。例えばタキトウスの『弁論家についての対話』5に *quid est tutius quam eam exercere artem, qua... praesidium amicis, opem alienis... ferat* 「友人には保護を、疎遠である人には援助を与えることのできる技術を練習することほど安全なことがあろうか」とあり、この *ferat* はしばしば修正されたが¹⁵⁾、その正しさは何十もの例で証明されている。

我々が我々の話し方の習慣を基準としようと思わなければ、この用法から、三人称単数は名前を挙げられた特定の人を指示しない、或は必ずしも指示するわけではなく、最も非個人的な表現形式であるという結論を引き出さねばならない。実際三人称単数は一人称及び二人称単数がその場にふさわしくない所で用いられると言えよう。とにかく誰が行為を行なうかが確定している時は、主語は表現されないことがあるという周知の現象、例えば *σαλπίζει* 「人がラッパを吹く」を、

上に述べたことと関連して思い出して頂きたい。全く同様に相手の意見を引き合いに出す際にキケローでは *inquit* が、割と後のギリシア人では *φησί* が使われたことも〔想起されたい〕。(シュヴァイクホイザーによるエピクテートス I, 4, 9 の注, ペントリによるホラーティウスの『随想詩』 I, 4, 79 の注, キーケルスの論文『グロッタ』 11, 184—5 頁参照。) 古アイスランド語の *segir* 「ある者は言う」等々についてはグリムの『ドイツ語文法』 IV, 265 (=2311) 参照。——この型全体をペデルセンが『クーン雑誌』 40, 141 及び 172—3 でスラヴ語, フィンランド語等の証拠をも使って論じており, Zubaty は『クーン雑誌』 40, 478 以下でもっと適切かつ豊富に論じている。

3. 次に我々は有名な問題, 非人称動詞すなわち三人称単数の非個人的用法の問題に逢着する。「非人称」(*Impersonale*) という表現はラテン語の文法家達に由っている。これと類似した表現は *Impersonativus* で, これは確かに二・三の人によって不定詞にも適用された。非人称動詞をもつ文は近代の学問〔言語学〕において非常に沢山扱われてきた。我々の言語とその同系の諸言語に関しては, 特にグリムの『ドイツ語文法』 IV, 227 (=262) 頁以下及びデールブリュクスの『比較統語論』 III, 23 頁以下を参照されたい。最も優れた専攻論文と言えるのは, 前に 2 頁で言及したスラヴ語学者ミクローズィヒの本『無主語文』(ヴィーン 1865 1883) と, もう一つは数年前に出たゲルマン語学者ジープスの論文『クーン雑誌』 43, 253 頁以下である。

まず非人称動詞という特別な部類について論じ, それを手がかりとして提出されている説を検討するのが最も適当だと思われる。まず自然現象の表示に使われるものを選ぼう。この種の主語のない文はほとんど全地球上に広がっており, とにかく全く異なる, 互いに関係のない諸言語に現われる。従って例えばラテン人が *pluit* 「雨が降る」と言うように, ギリシア人も *δει* (後には *βρέχει*) とする。同じく「雨が降る」を表わす語はインド語やドイツ語でも三人称単数で生じるが, セム諸語でも同様である。さらに *ning(u)it: veífei: es schneit* 「雪が降る」, 或は *fulgurat, fulget, fulminat: es blizt* 「稲光がする」, *tonat: βροντᾶ: es donnert* 「雷がなる」。またワルローはある時 *si nūbilare coeperit* 「もし曇り始めたら」と書いたが, それに反してカトーは受動態の *nūbilabitur* を用いている。これに対応するのがアリストパネースの断片 46 ζυννένοφε「曇った」である。ラテン人はまた *lūcēscit*

「明るくなる」と言い, これに対応して例えばポリュビオスは *διαφαύσκει* を持っており, *vesperāscit, advesperāscit* に当たるのが *συσκιάζει* 「夕方になる, 暗くなる」である。さらに例えば *calet* 「暑い」(ペトルローニウス) も同様であるが, プラウトゥスは *calētur* を用いている。さらに古典期以後の *gelat* 「凍る」や *rorat* 「露が降りる」, 或はギリシア語では(例えばトウキュディデース IV, 52, 1) *ἔσεισεν* 「地震が起こった」がある。

従って繰り返して起こる自然現象が単に動詞的表現だけで表わされる多数の表現が存在するのである。ところが専ら特定の自然現象の表示だけに限られるこれらの動詞の表現においてさえも, 主語との結合も至る所で現われることが知られている。殊に天候の動詞の場合には例えば神も主導者として挙げられたということが大きな関心をかきたてた。特にギリシア人は非人称で *ἀστράπτει* 「稲光りする」, *βροντᾶ* 「雷が鳴る」と言っただけでなく, すでにホメーロスが *Ζητὸς βροντῆ* 「ゼウスのいかずち」や *Διὸς μεγάλιοι κερραυτός* 「ゼウス大神のいかずち」について語るように, *Ζεὺς ἐβρόντησε, ἀστράπτει, ὄε* 「ゼウスがいかずちをとどろかせた, 稲光を出す, 雨を降らせ続けた」とも言っており, 雷や稲妻を最高の神の所有物とみなしている。v 103 行以下を参照せよ。そこでは女中が聞いたばかりの雷にゼウスの表れを見, それによってゼウスへの祈りへと誘発される。同じくローマ人も *Jūpiter fulgurat* 「ユーピテルが稲妻を放つ」, *Jove fulgente* 「ユーピテルが光を放つ」と言うことがある。アウグストゥス帝時代には *Jūpiter tonans* 「雷の神ユーピテル」の崇拜があった。そしてエトルリア人の風習に従ってローマ人の間で行われていた稲妻による埋葬では, 稲妻は *fulgur divum* 「神の稲光」と呼ばれる。それどころかこの話にはまだ先があり, ヴィッソーヴァ¹⁶⁾ の『ローマ人の宗教』² 122 頁は稲光を放つユーピテルの崇拜に言及しているが, そこではユーピテルが稲妻と完全に同一視されている。同様に 5 世紀のマンティネイアの碑文(『ギリシアの碑文』 V, 2, 288) には *Διὸς κερραυῶ* 「ゼウスの稲妻」とある。ウーゼナー¹⁷⁾ は『ライン文献学博物館』 60, 1 頁以下(=『小論集』 4, 471 以下) でそこから宗教史的な結論を導き出している。また最高の神の降らす雨が直接表現されるのが見られる。マルクス・アウレリウス¹⁸⁾ はその著『自省録』 V, 7 で *ὕσον ὕσον ὦ φίλε Ζεῦ* 「雨を降らせて下さい, 雨を降らせて下さい, ゼウス様」という古くからアテーナイで行われていた祈

りに言及している。ヘーロドトスにもこの語法がある。また見事な類例をアリストパネースが『鳥』1501に持っており、「ゼウスは何をやっているかね」という問いに対して、そこでは *ἀπαυθιάζει τὰς νεφέλας ἢ ζυννέφει* 「むら雲を払い去っているか、それとも雲を寄せているか」と言われている。最後に、*ὁ θεὸς ἔσεισεν* 「神が地震を起こした」とも言われ得ることがよく知られているが、そこでは恐らくポセイドーンが動作主として考えられている。特に恰好の例をアリストパネースが『アカルナイ人』510及び『女の平和』1142において見せる¹⁹⁾。

しかしそれだけが天候の動詞に主語を添える形式ではない。例えば〔自然〕現象が結びついている自然或は時間の一部が主語の役をすることがある。例えば *fulgente caelo* 「空が稲光を発すると」、*vesperascente caelo* 「空が暗くなると」、*caelum pluit* 「天が雨を降らせる」、*diēs illūcēscit* 「昼が明るくなり出す」。或はまた物質的な内容や出来事自体が名詞形で動詞に添えられる——*der Wind weht, der Regen regnet*。アリストパネースは『雲』580で見事に雲に *ἢ γὰρ ἦτις ἔξοδος, τὸτ' ἢ βροντῶμεν ἢ ψεκάζομεν* 「というのは、外国へ軍隊を出すような場合、雷を鳴らすとか、雨を降らすとかいうことを我々はするのです」と言わせている。——これらの動詞の多くが *pōcula rōrant* 「杯が露にぬれる」等のように比喩的な意味で現われるのは別問題である。

従ってこれらのすべての動詞には一方では主語のない用法が、他方では実際の主語との様々な結合が存在する。そして論理的な判断は主語と述語がなければ不可能であるから、論理学者たちはこのような主語のない文は根本において考えられないものだと思った。哲学者達に続いてパウロもその『言語史原理』において、これらのすべての文には主語を補って考えなければならないと要求した。しかし言語現象の判定にはそれ〔論理〕と共に異質の要因が持ち込まれる。〔従って〕我々は言語に存在するものに頼らなければならない。そこで次のことが問題となる。我々が動詞形だけしか持っていない所でも、言語上の表現において主語に関して指摘できるものがあるか否かである。この点で三種類の発言がなされている。まず、主語のない用法は、動作主たる神の表示を抜かすにせよ、天候の現象の空間或は材料の表示を落とすにせよ、一種の省略に基づくと言われた。例えば *ἔσεισεν* は *ἔσεισεν ὁ θεός* の短縮されたものと思われるかも知れない。すでにプリスキアヌスXVII, 60 (p. 144, 11) は *fulminat et*

tonat de Jove sōlō intellegimus 「稲光がする」や「雷がなる」を我々はユーピテルによってのみ理解する」と説明している。しかしこれは証明できない。我々が省略を考えることができるのは、より完全な表現がそれ以前に証明されている場合だけである。ところが非人称の用法は正しく神の名前を主語にもつ用法と同じくらい古いものである。ホメーロスは *ἀστράπτειν, βροντᾶν, ὕειν* においては後者〔の形成〕だけを提供するが、彼はまさに詩人としてそうしているのであり、彼があげばのを人として把えるのと軌を一にしている。我々にはこのような、動作主を問わないで出来事それ自体を述べることで満足する把握に対して、宗教的な把握の方が古いと仮定する権利はない。こう言ったからと言って、二・三の事例で、例えば『創世記』19, 24 *κύριος ἔβρεξεν θεῖον καὶ πῦρ παρὰ κυρίου ἐκ τοῦ οὐρανοῦ* 「主は硫黄と火とを主の所すなわち天から降らせた」（ヘブライ語からの逐語訳）の模写である『ルカ伝』17, 29 *ἔβρεξεν θεῖον καὶ πῦρ* (対格) 「天から火と硫黄とが降ってきた」のように、非人称表現が神の名前と結びついた表現の代わりになったという事を否定するものではない。——さらに我々がドイツ語やフランス語で確かにこの種の主語のない文を使わず、*es regnet, il pleut* と言うという事が時折証拠として出された。（この支柱としての代名詞についてはブルクマンの『ザクセン学術協会紀要・文献-歴史学部門』69, V, 1 頁以下が優れている。）しかしこの中性の代名詞が二次的なものであることは確実であり、ゴート語や古ノルド語はラテン語ほどそれを用いない。——第三に比較文法の形態分析が利用された。ポップ及びその他の人々は *ἔστι* の *-τι-φησί* の *-σι* はこれから音韻的に発生したもので、ラテン語とドイツ語の *-t* はこれと関係がある一が三人称単数の始原的な語尾であり、これは冠詞 *τό* と密接な関係がある、従って三人称単数の形態はそれ自身の中に主語の表現を含んでいると主張する。しかしこれもまた根拠がないことが明らかになる。先ず語尾 *-τι, -t* は問題になっている三人称単数の諸形態の一部にしか見出されない。だから *ὑει* や *νείφει* が *-τι* を含んでいたということは全くあり得ない。さらに *ἔστι* の *-τι* が代名詞 *τό* と関係があるというのは勝手な仮定である。それが *πίστις* 「信頼」、*φάτις* 「言説」、*σιτίς* 「喉の渴き」、*φάτις* 「疲れ」(*affatim* 「十分に」は本来「疲れるまで」の意)のような動詞派生抽象名詞に存在する *-τις* と関係があるというのは大いにあり得ることであり、ずっと可能性が大きい。——先入観を捨てて問題に向か

うと、主語のことを考えずに出来事が無造作にこの形式で表わされ得たことを認める所へ戻される。そしてこれは先に113頁で三人称単数の用法について確認されたこととぴったり一致する。

天候の表現だけが唯一の非人称動詞ではない。殊にラテン語では *piget* 「不快にする」、*puget* 「恥ずかしい」、*paenitet* 「不快にする」、*miseret* 「同情する」のような、小学生が習う表現やその外、感情を表わしたり我々の心に抑えがたく浮かぶ考えを表わす表現に使われる動詞がそれに加えられる。その際ここでもやはり、異なる仕方ではあるが、非人称表現と並んで人称表現も見出されるという事を先ず言わねばならない。すでに古代ラテン語の *puget*, *paenitet*, *miseret* では感情を抱く者が主語として表現される。*libet* 「気に入る」、*taedet* 「嫌になる」には *libens* 「喜ばしい」(これは独立奪格の構文にその分詞的な性質の実を示す)と *pertaesus* 「あきあきしている」が想起されねばならないが、これらは動詞の人称的用法を前提とする表現である。またそれと並んでこれらの動詞は喜びや嫌悪の念を起こさせるものが主語として置かれるようにも使うことができる。しかしここでも非人称の用法をより新しいものと解する理由はない。むしろある種の感情や思考を表わす動詞には、すべての言語で二重の表現がよく用いられると言わねばならない。我々が人称的用法を持つか非人称的用法を持つかは、どちらの扱え方が優位を占めるかによって決まる。後者は意志の関与なしに、すなわち我々自身が感情や思考の主唱者かつ創作者ではないのに、感情が我々を襲ったり、思考が流れ込んだりするという意識に由来する。最も外面的な感情だけを挙げれば、我々はドイツ語で *ich friere: es friert mich, mich friert* 「私は寒い」; *ich dürste: mich dürstet* 「私は喉が渴いている」; *ich schaudere: mich schaudert* 「私は身ぶるいがする」; *ich verlange: es verlangt mich* 「私は〜が欲しい」; *es ahnt mir (es schwant mir): ich ahne* 「私は予感がする」; *ich denke: es dünkt mich* 「私には〜と思われる」(=*es denkt in mir*:ニーチェ)と云う。ところでラテン語ではこの種の動詞概念の場合、人称的用法と非人称的用法とが相並んで生じるのを最も広範囲に観察することができる。例えば *vereri* 「恐れる」は普通は人称動詞であるが、キケローの『至善至悪論』II, 39, 同じくアッキウス²⁰⁾ やパークウィウス²¹⁾ もそれを非人称的に用いている。キケローには *quōs nōn est veritum in voluptate summum bonum pōnere* 「楽しみを最高の善だと思ふことを恐れなかった人々」とある。

同様にずっと後世の著者ウェナンティウス・フォルトゥーナートゥス²²⁾ は *horreo* と並んで非人称の *horret* を用いている。また *dolere* 「苦しむ」にはプラウトゥス以来両方の用法が並存している。動詞 *οἶσμαι* 「思う」は『オデュッセウス』で一箇所非人称として構成されている(τ 312 *μὸν οἶσται* 「私には予感がする」)。近代になるとむしろ人称的になる傾向が部分的に存在し、それは英語について確認された。例えば *I think* はドイツ語の *es dünkt mich* に、*if you please* はラテン語の *placet* に対応する。ドイツ語の *verlangen* や英語の *to long* が属するゲルマン語派においてこのような観察が特に広範囲になされ得る。しかし二つの用法のいずれにも絶対的な優位を主張することはできず、むしろ優位の交替が永久に続くことだろう。民族心理学にとって啓発的であるのは、ロシア語はドイツ語よりもこのような非人称動詞を多く持っており、ドイツ語はフランス語よりも多く、英語はもはや全く持っていないというバイイの確認である(『ブヴィエ記念論文集』, 11頁)。

我々が一般に個人的な行為として把えるものを、むしろ人格を持たない出来事として表わす現象が、原始的とみなされる諸言語に特有であるという事に注目して頂きたい。例えばグリーンランド人は我々が「私は聞く」と言う所で、「私に聞こえて来る」という表現を使用する(フィンク『主要な型』35f. 14)。彼らがそう言うのはそもそも正しいのである。

XXI.

非人称動詞の第三の範疇は概して必然性、義務、能力、出来事や存在を表わす動詞から成り、その際例えば *ἔξεσσι* 「可能である」、*opus est* 「当然である」、*nesesse est* 「必然的である」といった存在の動詞と組み合わせられた表現も考慮の対象になる。そのような必然性、義務及び必要の表現として例えばギリシア語では *χρῆ* と *δεῖ* の二つの動詞を挙げることができるが、これらこそそのような非人称表現が如何に様々な源から生じているかを示してくれる。*χρῆ* は元来名詞であり、名詞としては一つの形態でしか保持されていない(上記71頁)。しかし *δεῖ* に関しては、その非人称動詞への転化が我々の目の前で起こる。ホメロス全体で *δεῖ* は一回しか(I, 337)現われない(ちなみにピンダロスにも一回のみ——『オリュムピア頌歌』VI, 28)。そして例の少なさが理由もなく修正の試みを引き起こした。しかし5世紀以来それはますますよく起こるようになり、ついに *χρῆ* をほとんど完全に

排除する。この *dei* は動詞 *δέω* 「～を欠く」の、アイオリス方言では *δέω* の三人称単数で、本来「～から遠く離れている、ある事で劣っている」を意味する。アッティカ方言ではまだ非人称的用法と並んで人称的用法が見られ、例えば人称的に *πολλοῦ δέω* 「私はこれこれの事でずっと劣っている」とも、非人称的に *πολλοῦ με δεῖ* とも言うことができる。それと並んで *δέομαι* 「望む、必要とする、頼む」が現われ、これもまた稀に非人称的に使われることに注目すべきである。先ず第一にソポクレースの『コロノスのオイディプース』570とプラトーンの『メノーン』79C (とD) がそうであり²³⁾、それ以外にも近代になってヘーロンダースの短長格の詩VI, 41から例が出てきた²⁴⁾。ドイツ語の *bedürfen* の用法の類似した二重性を参照されたい。

最後に確認されたこと、すなわち人称的用法が容易に非人称に急変することと見事に並行する例をラテン語が提供する。*oportet, decet, dēdecet* のような義務を表わす古い表現に対して、以前は専ら人称的に「義務がある」の意味で使われていた動詞 *debere* が後に現われ、今や非人称的に *debet* 「それが義務である」の意味で使われる(レーヴステットの『エテリア巡礼』45)。中期英語の非人称の *must* と *ought* を参照されたい。²⁵⁾

次は可能性の表現である。ラテン語の *licet* 「自由である、できる」はその語源を確定することはできないが、すでにオスク語に例がある。それからここでも後の発展形態として元来人称動詞であったものの非人称的用法に出合う。本来「ある物を制している」を意味する *posse* について、すでに古代ラテン語は *potis est, potest* 「可能である」を持っている。*valet* 「可能性がある」はもっと後の作家達の例証をもつ。

〔古典期〕以後のギリシア語とラテン語からまだ二・三の例を挙げねばならない。ギリシア語の動詞 *ἀπέχειν* はなかでも「離れている、取り除いている」を意味し、そこから「～について了解済みである」という意味が生じる。福音書の *τὸν μισθὸν ἀπέχει* 「彼はその報いを受けてしまっている」という有名な言い回しもここに入る。ところで非人称の *ἀπέχει* も『マルコ伝』14, 41に「その件は話がついている」の意味で現われることは注目すべきである²⁶⁾。——新約聖書からもう少し挙げよう。アッティカ人は *ἀγειν τὴν ἐορτήν* 「祭を祝う」とか *ἀγειν τὴν ἡμέραν* 「これこれの日を過ごす」と言うが、『ルカ伝』24, 21には非人称の *ἀγει* を持つ *τρίτην ταύτην ἡμέραν ἀγει* 「今日が

三日目である」が出てくる。

後期のラテン語から、ロマンス諸語へ与えた影響の故に我々の関心を集める例を挙げるができる。『皇帝史』²⁷⁾ 中のタキトゥス帝の伝記(VIII, 1)に *habet in bibliothecā Ulpia librum elephantinum* と書いてあるのを読むが、これは逐語的に「ウルピウス帝の図書館には象牙の本を持っている(=本がある)」と訳することができる。*habet* はフランス語の *il y a* と全く同じく非人称で使われている。同様に例えば『エテリア巡礼』23, 2の、一群の新しいラテン語法を含む文に *inde ad sanctam Teclam habebat de civitate forsitan mille quingentōs passūs* 「その町から神聖なテクラの教会までまだ約1マイル半あった」とある。グリムの『ドイツ語文法』IV, 220 (=266) 及びペデルセンの論文『クーン雑誌』40, 137を参照せよ。

ギリシア語とラテン語の動詞の人称語尾によって、人称と数の外に、ギリシアの文法家が *διάθεσις* と呼び、ラテン人が態 (*genus verbi*) と呼んだものも表わされる。これは近代の諸言語も、人称語尾以外の手段によってではあるが、表現しようと骨折っているものである。

先ず私は我々の言語のすべてにおいて見出される区別、すなわち能動態と受動態の区別について語らねばならない。我々の言語慣用とそれによって条件づけられた語感にとっては、能動態と受動態だけしか態として考慮の対象にならず、しかも能動態は動詞の正規の、単一の表現形式と見なされるが、受動態は対応する能動的表現の言わば二次的な裏返し、せいぜい能動態の表現を補うものとして歓迎される付属品と見なされるという意味で問題にされる。大ていの近代語はそういう状態にある。ただし受動態の表現を形成するため、ある言語ではこの手段が、別の言語ではあの手段が使われるという事はある。大てい助動詞、特に「ある」や「なる」のような動詞、デンマーク語では例えば「留まる」という動詞による迂言法に出合う。しかしもっと自由な展望を持ってさらに遡れば、事情は幾らか違ってくる。北欧諸語では受動態の意味が特別な動詞形の代わりに、能動態に *sik* 「自分」から生じた *-s* 或は *-z* を付ける事によって得られるので、我々の方法からはすでに遠く離れている。しかしゲルマン語の最古の文化遺産であるゴート語まで遡れば、過去時制では再び我々の方法と同様の迂言的表現に出合うが、それ以外は固有の動詞語尾を持つ特別な受動態の形態に出くわす。例えば *ἀγιάζεται* 「崇められる」は *gaweiħada* によって訳される。これに対応する形態は

希求法現在にもある。従ってここでは受動態において、能動態形の付属品のようなものではなく、能動態と並行する語尾が見出されるのである。

ラテン語でも同様である。しかしここではさらに特異なもの加わり、能動態形と受動態形と並んで、受動態の語尾を持つてはいるが、意味は受動態ではない動詞が多数存在し、しかも受動態の意味に割と近いもの、例えば *morior*「死ぬ」や *orior*「立ち上がる」のような自動詞だけでなく、明白な他動詞も四つの活用すべてに存在する。この範疇はすでに古代の学者達を手こずらせている。それが型にきちんと納まらなかったからである。彼らはそれらの動詞を *deponentia* と呼び、後にこれをギリシア人は *ἀποθετικά*「受動態の意味を捨てた動詞」と翻訳した。しかしこれはナンセンスだと思われる。ではそれは如何に説明すべきだろうか。

再び一步遡り、ギリシア語を見れば、表現形式が一層多様になるが、我々はますます問題の根源に近づく。だからこれまで以上にギリシア語を根拠に用い、そこから出発しなければならないだろう。そうすればギリシア語以外の態の意味も一層明瞭になるだろう。今しがた *διάθεσις* という表現を引用したギリシア人の理論自体が話の糸口になる。ディオニューシオス・トラクスの文法の13章で「三つの *διαθέσεις* が存在する。すなわち1. *ἐνέργεια*「行動」、2. *πάθος*「被ること」、3. *μεσότης*」と教えられる。そして *μεσότης* の特徴として、ある時は活動を、ある時は受ける事を表わすと述べられる。*ἐνέργεια* の例としては *τύπτω*「打つ」が、*πάθος* の例には *τύπτομαι*「打たれる」が挙げられる。*μεσότης*「中動態」の例としては一方では *πέπηγα*「突き刺さっている」と *διέφθορα*「正気を失っている」が、他方では *ἐποιήσαμην* と *ἐγραψάμην* が挙げられている。先ず第一に、ここで発言している語学者達が態に関してすでに我々と同じ立場を取っていることは明らかである。彼らにとっても主な区別は能動態と受動態の対立にある。この型に入らないものは怠惰に起因する *μεσότης*「中間にあるもの」という用語で片付けられる。その際彼らが中動態のアオリストだけでなく、すでにホメロスに見られる *πέπηγα*「私はぐらつかない」のような、動詞自体は他動詞であるが、第二完了と我々が呼ぶ自動詞的な完了をも *μεσότης* に引き寄せているという点で、我々と古代の文法家達の用語法に多少のずれが生じるという事に注意を促そう。この *πέπηγα* はヘレニズム時代のギリシア語が新しい完了形 *πέπηγα*—他動詞の意味を持

ち、現在時制の *πήγνυμι* に対応する—を作っていたので、アレクサンドレイア時代の学者達によって本来の能動態から締め出されたのであろう。しかしディオニューシオスによって中動態に引き入れられたもう一つの完了形について言えば、アッティカ人は *διέφθορα* を他動詞として用いるが、イオーニア人や古典期以後の時代のギリシア人は自動詞として用いている。他動詞の完了形としては5世紀にはやり出した *διέφθορακ* が彼らの役に立ったからである。他の動詞についても同様のことが起きた。

この記述に従うならば、確かにアオリスト時制には三種類の形態 *ἔγραψεν*, *ἔγραψατο*, *ἔγραφή* が存在するが(未来時制も同様)、残りの時制では中動態と受動態を表わす一種類の形態だけがこれらの時制〔アオリストと未来〕の中間的で受動的な形態に相当するという事が今や明白である。

では我々はこの三幅対に対してどういう態度をとればよいただろうか。もっと過去に遡って、印欧諸語の最古の段階を調べれば、本当は大事なものは中動態と能動態の区別であり、受動態は少し遅れて現われ、形成されたものに過ぎないという事が明らかとなる。ギリシア語が根本においては固有の受動態の形態を全く持っておらず、受動態の機能のために一部は中動態と同じ形態が、一部は能動態の、最初は現在と完了の、最後はアオリストの、特別な能動態の形態がつかわれたという点で、ギリシア語についてはまだこのことが確認できる。次に我々が能動態と中動態を最初に存在したのものとして基礎づけるや否や、ラテン語だけでなくギリシア語にも多数認められるいわゆる能動態形欠如動詞の存在も明らかになる。我々は次のような動詞が存在すると言うだろう。

1. 能動態と中動態の屈折を持ち、ひよっとすると中動態の形が受動態の意味を持つことがある、例えば *φέρω—φέρομαι*

2. 能動態でだけ現われる動詞、例えば *κλύω*, *στείχω*, *στίλβω*, *φεύγω*

3. 中動態だけの動詞、例えば *ἤμια*, *κείμαι*, *νέομαι*

そして中動態だけの動詞の数は能動態だけの動詞の数より多い。従って能動態形欠如動詞とは能動態の屈折に助けてもらえない中動態に他ならない。そこで我々の課題は能動態形欠如動詞の中に中動態の意味の契機を発見することになる。

真に科学的な観察の基礎を置いた後は、先ずギリシア語から出発して能動態の形態と中動態の形態の用法

に境界を定め、そして態を表わすために使われる語尾の意味をより正確に規定することが重要である。その前に二・三の事を予め言うておかねばならない。

人称語尾で主語の人称が数を含めて示されるだけでなく、態も人称語尾を変えることによって表わされるという事が注目に値する。そこから、本当の人称語尾を持たない動詞形は態の区別をも持ち得ないという事が分かると思われる。そこで三たび（85頁や106頁のように）現在語幹だけから成り、大体単数と二人称に向けられてはいるが、数と人称に対して比較的中立的に使われた *-e* で終わる命令法について語らねばならないだろう。それに応じてこの命令法には、大体は能動態で使われるのであるが、態に対しても中立の名残が見られる。その確実な例は先ず *παῦε* 「止めよ」(アッティカの喜劇では *παῦ* も) であり、この動詞の能動態の形態はいつも他動的・使役的(「止めさせる」)であるが、「止める」の意味は中動態にのみみさわしい。また *ἐγείρε* 「目覚めよ」(Eurip. 『アウリスのイーピゲネイア』624, フォン・デア・ミュールによればアイスキュロスの『慈みの女神たち』140の最初の *ἐγείρε'* も)も同様に解され²⁸⁾、後に「立ち上がれ」の意味でも「使われた」(『新約聖書』のギリシア語についてはプラス・デブレンナー101頁やライシェンシュタイン²⁹⁾, GGA. 1921, 167頁参照)。——このことはさらに命令法の形態の第二のグループ、すなわち後でもっと詳しく論じることになる *-τω*, *-το* に終わる命令形についても認められ、これらはギリシアとラテン語に共通で、もともと数と態に関して全く中立であった。これはギリシア語では消滅したが、ラテン語では上代語で能動形欠如動詞がその命令法を *-tor* によってだけでなく、*-to* によっても形成し得るとい事が注目される。

他方、態の区別は人称語尾の形態を越えるという事を思い出さねばならない。昔から分詞がこれに関与しており、ギリシア語では忠実に保持されている。ラテン語では中動態の分詞は一般に減んでいる。それでも石化して残っている中・受動態の分詞に注意を促そう。*τρέφόμενος* が *τρέφειν* 「養う」に属するように、*alumnus* 「養子、子息、弟子」は *alere* に属し、「養育される」者の意である。*Vertumnus* という神の名前を人々は(恐らく誤って!)「変えられる」者の名称と解釈するだろう。いつもは能動態の分詞がしばしば中動態の代わりに用いられる。それ以外に *-tus* に終わる動詞派生形容詞が、ギリシア語でこれに対応する *-τός* に終わる語が持っている価値の故に、中・受動

態の分詞の代りに用いられている。プロペルティウス IV, 2, 10行以下の箇所 *Vertumnus versō dīcor ab amne deus, seu quia vertentis fructum praecēpimus annī Vertumnī vulgus crēdidit esse sacrum*³⁰⁾ 「私は川の流れを変えることからウェルトウムヌス神と呼ばれている。或はめぐる季節の最初の産物を私が受け取ったので、人々はウェルトウムヌスのものは神に捧げられたものだと思った」に出てくる *versus* と *vertens* は神の名前に保持されているように見える分詞形の、後期ラテン語に可能な代替形である。(sequor には *secundus* と並んで受動的な *-ndus* もあり、morior には *moribundus* 等もあることを参照せよ。)——不定詞について言えば、有史以前は態に対して中立的であったが、すでに最古のギリシア語とラテン語は態の区別を不定詞に採り入れている。

我々がギリシア語を観察の基礎にする時、強調しなければならぬのは、方言が互いに著しく違っており、さらに数世紀のうちに大きな改変が生じたので、態の用法は他の現象ほど十分なまとまりを示さないという事である。例えばイオーニア方言は、アッティカ方言が能動的な表現を用いる所で、多くの場合中動態を持っている(ベヒテル, 『ギリシアの方言』III, 246頁以下)。イオーニア方言の慣用はその後時々いわゆるコイナーに受け継がれた。例えば「占める」という概念はアッティカ方言では *καταλαμβάνειν* によって、イオーニア方言では *καταλαμβάνεσθαι* によって表わされるのであるが、ポリュピオスも中動態を持っている。一体に古典期以降のギリシア語はしばしば能動態と中動態の境界線を跳び越えており、古い言語からの甚しい逸脱が見られる。どちらかと言えば言語共同体の間及び下の階層においてはあがあるが、アッティカ・ギリシア語の表現の優雅さと精密さがしばしば失われている。例えばアッティカ人は能動態の *μοιχεύειν* と中動態の *μοιχεύεσθαι* を厳密に区別するが、これは *γαμειν* と *γαμείσθαι* の区別にかなり正確に対応する。*Γαμειν* は「妻をめとる」を意味し、男性の結婚について用いられるが、これに応じて中動態の *γαμείσθαι* は女性の結婚について用いられる。同様に *μοιχεύειν* は男性の姦通を、*μοιχεύεσθαι* は女性のそれを表わす。聖書に表われたギリシア語法において確かに『レビ記』20, 10ではこの動詞の能動態と中動態が正確に対比させられているが、それ以外は旧約聖書でも新約聖書でもこの動詞の能動態形と中動態形が雑然と入り乱れている。同じくドーリア人は彼らの能動態 *μοιχᾶν* を男性に関して用いているが、新約聖書では *μοιχᾶσθαι*

が二つの性のいずれにも任意に使われている。

これは恐らく非ギリシア人が態を区別できなかった事と多少関係があるろう。我々はこの無能力をギリシアの詩人達が、外国人の語り口を紹介した箇所から指摘することができる。新たに発見され、1903年にフォン・ヴィラモーヴィツによって出版されたティーモテオス³¹⁾のノモスに登場するフリジア人は詩人自身の証言によれば半ば外国語風のギリシア語を話し(158行 'Ελλάδ' ἐμπλέκων Ἀσιάδι φωνᾶ「アジア的なアクセントのあるギリシア語で」、ヴィラモーヴィツ42-3頁参照)、そして167/68行では κάθω「私は座るだろう」、ἔρχω「私は行くだろう」と語り、接続法現在に未来の意味を与えたり、能動形欠如動詞に能動態の語尾を与えたりしている。その逆の例がアリストパネースの『平和』291にある——ὡς ἡδουμαι καὶ χαίρουμαι καὶ ἀφραίνουμαι「いや気がよい、楽しくあるね、愉快だね。χαίρω の代わりにこの χαίρουμαι は全くギリシア語的でない。それは「ダティス³²⁾特有の語法」と見なされ、ダティスの歌から引用されている。この χαίρουμαι が含まれた外国人の或る小さな歌曲が存在したに違いない。(ヴィラモーヴィツによる『ティーモテオス』43の注参照。彼は喜劇に登場する小アジア人を想起している。)そこで私は二つの興味深い点を指摘しよう。一つは、アリストパネースの場合、中動態の動詞との共起が明らかに中動態の χαίρουμαι をもたらしたという事、第二は、この χαίρουμαι が今日近代ギリシア語で優勢になっている事である。ある種の形態の近隣関係が如何に容易にずれを引き起こすかについては49頁以下で詳説した。態に関してそのようなことがアリストパネースの『騎士』1057でも見られる。そこでは μαχέσαιο「いくさをすれば」を持つ脚韻のために χέσειε ではなく χέσαο「くそをしてしまう」が作られたのである³³⁾。

訳 註

- 1) クラティーノス(前490頃-422年) エウポリス、アリストパネースと共にアッティカ古喜劇の三大詩人の一人。『嵐の中の人々』、『サテュロス達』、『酒瓶』、『ディオニューサレクサンドロス』等が伝わっている。
- 2) Theodor Kock (1820-91年) ドイツの古典学者。『アッティカ喜劇作者伝存断片集』の編者。
- 3) ἴτω は εἶμι「行く」の命令法三人称単数形、εἰσόγγελλε は命令法二人称単数形。
- 4) 欠如動詞 *for は Skt. の bhā-mi 'appear', bhāś 'shine', bhāśh 'speak' に対応し、Gr. では φαίνω 'make to appear', φημί 'say' に対応するが、φημί は欠如動詞ではない。
- 5) Ψ707 の πειθήσεσθον は二人称双数形、753の πειρήσεσθε は二人称複数形。
- 6) Loeb 版では ea が et と直されている。
- 7) 『崇高について』は19世紀の初めまでカッシオス・ロンギノスの著書だと信じられていたが、全く別の無名の人の著。約三分の二が伝存しており、紀元後50年頃書かれたらしい。修辞学の伝統にとられず、文章を崇高なものにする思考と文体について論じたもので、ボアローの翻訳(1674年)以来文芸批評及び古典の理解に19世紀まで影響を及ぼした。
- 8) 影響力を持っていた裕福なアテーナイ人で、デモステネースの古くからの政敵。
- 9) Maximilien P. E. Littré (1801-81年) フランスの医者、言語学者、哲学者。言語学者としては *Dictionnaire de la langue française* 4巻の編集のほか *Histoire de la langue française* を書いている。
- 10) Loeb 版では *Si in ius vocat, <ito>. Ni it, antestaminō*。「もし原告が被告を法廷に召喚したら、彼は行くべし。もし彼が行かなければ、原告は証人を立てるべし。」としており、*A Latin Dictionary*, p. 131 は *antestator* に直している。*-minō* の形態は珍しいが、これは受動態の命令法現在二人称複数の語尾 *-minī* が基になって、これに命令法未来二・三人称の語尾 *-tō* の母音が付いてできたものらしい。印欧祖語には *-tō* に終わる命令形しか存在せず、これが単数複数の別なく、二人称でも三人称でも使われた (L. R. Palmer, *The Latin Language*, pp. 276-7)。
- 11) X199 ὡς δ' ἐν ὄνειρῳ οὐ δύναται φεύγοντα διώκειν「ちようど夢の中で、逃げてゆく者を追いかけても、(けして捕えは)できないように」では *δύναται* (3. sg.) の主語は明示されていない。
- 12) Pindar Isthm. 5, 22-3 εἰ δὲ τέτραπται/θεοδότων ἔργων κέλευθον ἀν καθαρὰν「もし神々しい行為へ至る確実な道に入ったならば(詩人はその苦勞にふさわしい報酬を歌の中に混ぜることを惜しんではならない)」でヴァッカーナーゲルは *τέτραπται* の主語を「誰かある人」と解しているが、Loeb 版の訳者 (Sir J. E. Sandys) は *she* としているので、アイギーナ島を主語と解す

るのであろう。

- 13) カエキリウス・スターティウス(前219-166年頃) 奴隷としてローマへ来たケルト人。ギリシアの喜劇を手本にした *palliatae* を書いたが、現存するのは300行ほどの断片と約40の題名のみ。そのうち17の題名はメナンドロスのものと同じ。プラウトゥスとテレンティウスの中間に位置する。
- 14) Manutius (1450頃-1515年) イタリアの印刷業者で古典学者。今日のイタリック体活字を初めて使用したり、ヘレニズム研究のため〈新アカデミア〉を創立したりした。
- 15) Loeb 版も *ferās* に修正している。
- 16) Georg Wissowa (1859-1931年) ドイツの古典文献学者。ローマ宗教史の権威。
- 17) Hermann Usener (1834-1905年) ドイツの古典学者。特にエピクロスとギリシアの宗教の研究で有名。
- 18) マールクス・アウレリウス (121-180年) ローマ皇帝 (161-180年)。『自省録』は陣中の寸暇に記したもので、ローマ帝政期のストア哲学の代表的文献の一つとされる。
- 19) 『アカルナイ人』510-11
*καὐτοῖς ὁ Ποσειδῶν, οὐπὶ Ταινάρῳ θεός, σείσας ἅπασιν ἐμβάλοι τὰς οἰκίας**
(されば、タイナロスにいます神ポセイドンが— 揺りゆすってきやつらの頭上に家をぶつつぶされますよう。——村川堅太郎訳)
『女の平和』1142-43
ἡ δὲ Μεσσήνη τότε ὀμῖν ἐπέκειτο, χῶ θεὸς σείων ἅμα.
(そのときメッセネはあなた方に襲いかかり、同時に大地は打ち震えました。——高津春繁訳)
- 20) ルーキウス・アッキウス (前140-85年頃) 初期のローマの悲劇詩人。題名が知られているのは約45篇であるが、作品自体は断片のみ、例えば『アンドロメダ』、『アトレウス』、『メレアゲル』、『ピロクテータース』、『武器の審判』、『デキウス』及び『ブルトウス』という二つのプラエテクスタ悲劇、ギリシア・ローマの詩に関する『劇詩史』、農業上のことに関する詩など。キケローはアッキウスを大いに尊敬していた。また彼の崇高な文体はウェルギリウスによって模倣された。
- 21) マルクス・パークウィウス (前220頃-130年) エンニウスの甥で弟子。アッキウスにとっては先輩にあたるローマの偉大な悲劇詩人の一人。画家

としても有名であった。『武器の裁判』、『アンテリオペー』、『アタランテ』、『洗い水』、『ヘルミオネー』及び『パウルス』というプラエテクスタ劇を含む12の題名が知られている。

- 22) ウェナンティウス・フォルトゥーナトゥス (530頃-610年) イタリアの中世ラテン詩人で、最後のローマ詩人と呼ばれた。ポアティエの司教でもあった。
- 23) Oed. Kol. 569-70
Θησεῦ, τὸ σὸν γενναῖον ἐν σμικρῷ λόγῳ παρήκεν, ὥστε βραχέα μοι δεῖσθαι φράσαι.
(テセウス、あなたの気高い心は、その短い言葉によくあらわれている。それゆえおれの言うことはわずかですむ。——高津訳) しかし、Oxford 版では *βραχέα μὴ ἀδεῖσθαι* という読みが採用されている。
Menon 79 c
δεῖται ὄν σοι πάλιν ἐξ ἀρχῆς, ὡ ἐμοὶ δοκεῖ, τῆς αὐτῆς ἐρωτήσεως, ὧ φιλε Μένων, ...
(そこで君にはもう一度改めて同じ質問が必要ないようにわたしには思われるよ、メノン君。——岡田正三訳)
- 24) Herodas VI, 41 *τὴν μεν γλᾶσσαν ἐκτεμῖν δεῖται.* (私は舌を切り取らねばならん)
- 25) OE *mōt* の ME における普通の意味は「私に許されている」であり、16世紀前半までその用法があった。例えば *As evere mote I drynke wyn or ale* 「いつもぶどう酒やビールが飲めるように」(Chaucer, *Cant. Tales, Gen. Prologue*, 832)。そして「しなければならない」という必然性の意味は最初は仮定的な主張としての過去の非人称的使用(本来は接続法)で発達したようである。例えば *us moste putte oure good in aventure* 「我々は財産を運命に委ねなければならない」(*Cant. Tales, Canon's Yeoman's Tale*, 946)。この用法は15世紀末頃まで見られるが、その後人称構文に取って代わられた。また「義務がある」の意味の *ought* (*to*) も初めは接続法ですでに後期 OE から用いられた。例えば *þes we ahten to beon þe edmoddre* 「それ故我々は一層つつましくすべきである」(*Lambeth Homilies*, p. 5, 28-9, 1200年頃の写本)。非人称の例としては *Wherfore us oghte, as wel in the deeth of oure children as in the los of oure othere goodes temporels, have patience* 「ですから、人は子供をなくしたり、財産

を失った場合でも、辛抱してその悲しみに耐えなければなりません」(*Cant. Tales, The Tale of Melibee*, 1000-03).

(K. Brunner, 『英語発達史』, pp. 676-78 及び宮部菊男編『中英語テキスト』, p. 237)

- 26) Marcus 14, 41 *καὶ ἔρχεται τὸ τρίτον καὶ λέγει αὐτοῖς, Καθεύδετε τὸ λοιπὸν καὶ ἀναπαύεσθε; ἀπέχει ἤλθεν ἡ ὥρα, ...* 「(イエスは) 三度目にきて言われた, 「まだ眠っているのか, 休んでいるのか. もうそれでよからう. 時がきた. ……」」この訳は非人称として「領収済である」→「十分である」と解釈したもの. 人称的に解すれば「彼(ユダ)は〔金を〕受けとっている」となり, また *ἀπέχει τὸ τέλος* 「もうおしまいだ」と書いてある写本もある. (岩隈直著『新約ギリシア語辞典』, p. 51)
- 27) ハードリアヌス帝から3世紀末のヌメリアヌス帝までの30名の皇帝の伝記. 6名の著作家が少しずつ寄稿したものを集めたもので, スウェートーニウスの『皇帝列伝』を模範としている.
- 28) Eurip. I. A. 624 *ἔγειρ' ἀδελφῆς ἐφ' ὑμέναιον εὐτυχῶς* 「お姉さまのお嫁入だから, 仕合せにお起きなさい。」
Aesch. Eum. 140 *ἔγειρ', ἔγειρε καὶ σὺ τήνδ', ἐγὼ δὲ σέ.* 「起きるんだ! 私がお前を起こすように, お前も彼女を起こすのだ。」

29) Richard Reitzenstein (1861-1931年) ドイツの古典学者. 殊にギリシアの神話や古代宗教の研究者. GGA. という略号については不詳.

30) Loeb 版では *vulgus credidit* が *rursus credis id* と二人称単数に直され, “Or else because I receive the first-fruits of the year as it turns its round, for this reason also thou deemest that offering to be Vertumnus' due” と訳されている.

31) ティーモテオス (前450-360年頃) 小アジアのミーレートスの人で, ディーテュランボス詩人. 1902年に前4世紀のパピルスから発見された『ペルシア人』は堅琴に合わせて歌う叙事詩(ノモイ)であり, 彼は音楽を改革したと言った.

32) マラトンの野でアテナイ人に前490年に破られたペルシアの将軍で, 彼はギリシア語の知識を誇っていたが, 本当は間違いだらけだったという. 一方, 彼は品行のよろしくないリュディア生れの奴隷だったという説もある(高津春繁).

33) Ritter 1057 *ἀλλ' οὐκ ἂν μαχέσαιτο' χέσαιτο γάρ, εἰ μαχέσαιτο.* 「ただ女子には戦さはできぬ, いくさをすれば, くそをしてしまうぞ」——松平千秋訳.

(今回も同僚の松川弘氏に訳文を読んで頂いた. ここに記して謝意を表します.)